

巻頭言

図書室として広いスペースは必要か？

広島赤十字原爆病院 院長
土肥 博雄

私が広島赤十字病院に赴任した昭和59年には当院の図書室は中二階の辺鄙な所にあった。病院勤務の初日、副院長の藏本 潔先生が真っ先に案内されたのは、この薄暗い図書室なのである。中には妙齢の（私から見て）お嬢さんが、タイプライターの前に座っていた。翌年、私は研究費を貰うことが出来た。使途は問わないとのことであったので、イタリアのオリベッティ電動タイプライターを購入し図書室に設置した。そのタイプライターは一行毎にタイプした文字がディスプレイ上に表示されるもので、当時20万円相当したと憶えている。その後、ワープロが全盛期になりこの様な中間的な機械は駆逐された。

世の中の動きは想像を絶する速さで動いている。2002年11月に中国広東省で起きたSARSの時、講演を聴いた私は引用された「The New England Journal of Medicine」の論文を探したが見つからなかった。演者に電話して原本の在りかを尋ねたところ「Internetでのみ見られるバージョンです。」と言われ、初めてInternetで見る文献を知った。早速調べてみると直ぐに見つかり、Full Paperを手に入れた。随分遅いのであるが、それだけ勉強していなかった証であろう。

院長になり、出来るだけ雑誌はInternetで取るように指示した。当初、中々進展しな

かったが、現在は本社のコンソーシアムによるポータルホームページから350以上の雑誌がオンラインで利用できるようになっていいる。本社のコンソーシアムが現在の形になったのは約3年前からであるが、時代も随分変わったと思わざるを得ない。

前述の「The New England Journal of Medicine」は1810年発行のVol.1 No.1から閲覧可能である。その他Cancer Research、The Lancet、Nature、Blood、等我々の知っている殆どが網羅された。

これが医局の卓上のパソコンから取れるのである。医療機能評価機構からは図書室の面積の確保が言われているが、図書室は小さくて良い時代に入っていると思うのである。